



第 55 回 「ある知財法学者の軌跡」の言葉

中山信弘「ある知財法学者の軌跡」(弘文堂、2022 年 4 月)は著者の喜寿の記念として出版された自伝、回顧録です。著者自身の執筆による記事、門下生との Q&A、門下生によるエッセイからなっています。この種の記念出版は著者の仲間、門下生など、限られた人たちが読む類のものですが、本書が一般書として販売されていることを知り、教育研究分野は異なるものの私も過去に大学に籍を置いていたことから、参考までに購入して読んでみました。

著者は東大法学部において知的財産法学の教育研究に携わってきました。文系の研究なのでその方法は理系の研究とは大きく異なっていますが、教育研究に対する著者の姿勢に共感するところがありました。その中で、理系の研究にも通じる考え方や主張が見つかりましたので、それらを以下で紹介しましょう。

著者は大学の最終講義において、研究に関し「研究者の仕事は、実務家とは異なり、すぐに役に立つものを行う必要はない。一見、無駄と思えることができるのが我々研究者の特徴であり、その特権を生かさず実務に埋もれてしまうような学者であってはならない。」と述べました。これは理系の研究にもあてはまります。特に工学部では実用化、産業化につながる研究が行われがちですが、そのような中でも欧米で流行しているテーマに飛びつき、追いつき追い越せを狙うのではなく、独創的な研究を生み出すことが大学では重要なのです。

著者は定年後も活発に活動しており、それを通じて「学者とは光を与えるものであり、熱を与えるものではない」と考えたそうです。これも理系の研究に通じます。上記の「追いつき追い越せ」研究では、余計なことを考えずに力わぎで進めるもの、即ち熱量の多さが決め手となります。これに対し独創的研究は周りを明るく照らす光を発するのです。

一方、教育に関して著者は「大学の任務は、即戦力とはなるが賞味期限の短い小さな完成品を世に出すことではなく、賞味期限が長く、応用範囲も広い、大きな未完成品を世に出すことにある」と述べました。さらに門下生の一人が執筆した本書の「あとがき」において、「中山先生は、門下生の研究に過剰な介入を行うことは、「プチ中山」を作ることになってしまうという思いから、門下生には最大限の研究の自由を与える方針を取られました。」と記しています。これは独創的研究の引継ぎに関する主張だと思います。恩師がいかに独創的な研究をしたとしても、その人が現役を退くとともにその研究も寿命を迎えます。門下生はその寿命が尽きるころに研究を始めますが、それでは遅い。恩師の研究はいわば「科学史」の勉強です。恩師の影響を感じさせない新しい独創的研究を自分で生み出す必要があるのです。

さて以上のように考えると、米国物理学会の月刊誌 Physics Today, vol. 75, no. 8, p. 59 (2022)に最近掲載された Eugene Newman Parker の死亡告知記事を思い出します。Parker(1927-2022)は太陽物理学に関する優れた研究者です。400 編を超える論文を発表していますが、そのほとんどを Parker が一人で書いています。1958 年には太陽風を予言した理論の論文を投稿しましたが、その内容があまりに先駆的であったため査読者

はその正当性を信じなかったとのこと。しかし論文中の数式には誤りが無かったので編集者は出版を許可したそうです。その後 1962 年になってその正当性が観測データをもとに確認されたそうです。この経験から Parker は若手研究者にしばしば次のような助言をしたそうです。「あなたが新しいことや革新的なことをするとき、必ず困難を味わうでしょう。しかしくじけず考え続けなさい。なぜならば、仮にもしあなたが間違っていたとしても、あなたはそれについてさらに深く知りたいと思う第一の人間になるだろうから。」Parker は決して彼の学生と共著の論文を書きませんでした。その代わり彼らには自分とは独立であるべきと力説したそうです。すなわち恩師の影響を感じさせない新しい独創的研究を自分で生み出すよう励ましたのです。